戦後史探検 13
昭和六十年代を歩く

闇に挑んだ記者たち

―八〇年代朝日の統一教会報道―

上

ノンフィクション作家　三山　喬

いまから約四半世紀前、三十代後半まで朝日新聞社に勤務した私は、さまざまな不条理に敢然と立ち向かう記者像にはほど遠い、取材上のゴタゴタを極力避けようとする〝弱腰の記者〟だった。組織勤めのストレスにも耐性を欠き、ニュース報道の現場からは十三年ほどでドロップアウトした。

つまり、年若い現役記者たちに大口を叩ける立場にはないのだが、それでもシニア世代の一読者として、この夏の古巣の紙面には落胆を禁じ得なかった。

安倍晋三・元首相の殺害をきっかけに噴き出した旧統一教会（世界平和統一家庭連合）問題への報道姿勢である。

このことは朝日だけでなく、他の全国紙やＮＨＫにも言えることだった。反社会的カルト教団と政権与党との長く深いつながり――。国政への信頼を瓦解させかねない権力の闇に光を当て、世間に知らしめる役割を担ったのは、旧来の〝主要報道機関〟でなく、限られた民放番組と週刊誌の報道、そしてＳＮＳの拡散力だったのだ。

曖昧な報道姿勢を取った主要メディア

安倍氏殺害の実行犯・山上徹也容疑者が「統一教会に家庭を破壊された恨み」を動機として供述したことは、逮捕日のうちに伝わった。にもかかわらず当の教団がその三日後、自ら会見を開くまで、主要メディアはほぼすべて「ある宗教団体」と教団名をぼかした報道しかしなかった。

安倍氏を標的にした理由に関しても、容疑者が氏と教団に「つながりがあると思い込み……」と、あたかも根拠のない妄想による犯行のようなニュアンスでしばらくは報じられた。実際には、安倍氏こそが教団と自民党の〝隠された関係〟のキーマンであり、その点では容疑者の見立てが筋違いだったわけではない（もちろん、そのことは凶行を正当化しない）。

要は今回の事件で明るみに出た政権とカルト教団の蜜月を、さほど問題視しないスタンスで主要メディアは長期間、事件を報じ続けたのだ。

そういった〝横並び報道〟を打ち破ったのは、約二十年前からコツコツと統一教会問題を追い続けるフリージャーナリスト・鈴木エイト氏らを連日解説者に起用したワイドショー『情報ライブ　ミヤネ屋』（読売テレビ）と、『報道特集』『報道１９３０』などの番組でこの問題に切り込んだＴＢＳ。これらの衝撃的な報道内容がネットで日々大反響を呼んだのに、主要メディアは緩慢に部分的な〝あと追い〟をするに留まった。

事件から約ひと月を迎えるころ、ＳＮＳ上ではＮＨＫの極端な不作為にまず批判が沸き起こり、次いで朝日に対しても「#さよなら朝日新聞」というツイッタータグに書き込みが集中した。

リベラル紙の代表格と見なされてきた朝日には、以前からネット右派による批判が常態化していたが、今回の書き込みは明らかにその手のものとは別種類、むしろ長年の朝日支持層が「購読をやめる」「失望した」と口惜しさを滲ませた。

自分個人の過去の〝弱腰〟を棚上げして言うならば、そういった口惜しさや寂寥は私も共有した。三十年以上前、若き日の私が働いた職場には、それこそこの教団追及の草分けとして活躍した先輩が何人もいた。そのことを鮮明に記憶するからだ。

重苦しい闇にひるまず切り込んだ一九八〇年代の朝日記者。私はただ、その姿を遠巻きに眺めただけなのだが、今回の事態を機に、改めてその何人かに話を聞いてみることにした。彼らはあのころなぜ、かくも果敢に戦うことができたのかと。

その具体的な内容を紹介する前に、私はまず、あのころの自分の情けなさを明かしておく。駆け出しの地方支局記者だったころ、実は一度だけ、統一教会の脱

みやま・たかし●1961年神奈川県生まれ。著書に『国権と島と涙～沖縄の抗う民意を探る』（朝日新聞出版）、『還流する魂（マブイ）　世界のウチナーンチュ120年の物語』（岩波書店）など。